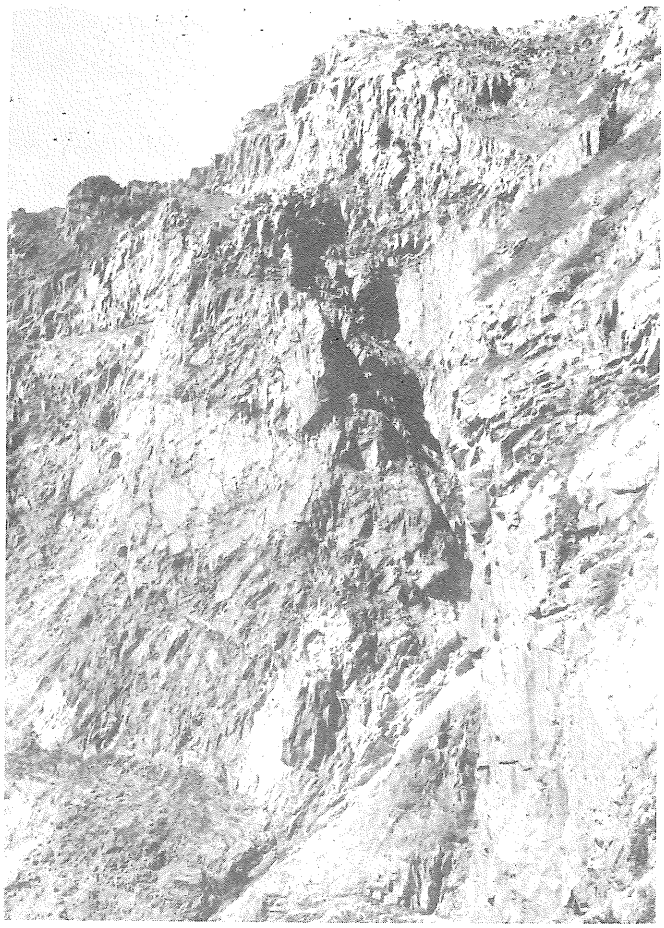
会　報

1982

No.13



1981年8月　前穂高岳東壁

KAC

神戸山岳会

目　　次

昭和56年度　夏山合宿報告

序　　文 …… 星野辰也 … 1

合宿の概要 …… 1

A班行動記録 …… 川辺秀司 … 2

奥又白にて思う …… 内藤正司 … 4

滝　　谷 …… 山本泰彦 … 5

四峰正面壁北条新村ルート …… 星野辰也 … 7

前穂東壁　右岩稜～Aフェース …… 山内教史 … 8

前穂北壁～Aフェース …… 小林利樹 … 9

夏山合宿 …… 吉田典夫 … 9

夏山合宿 …… 幸内義孝 … 10

夏山合宿に参加して …… 井上雅代 … 11

昭和56年度　個人山行 …… 13

大台・東ノ川 …… 山本泰彦 … 13

小荒井沢 …… 幸内義孝 … 14

滝　　谷 …… 山内教史 … 14

笠ガ岳 …… 米沢典之 … 16

氷ノ山・八木沢左俣 …… 山本泰彦 … 17

屏風岩・ールンゼ …… 吉田典夫 … 18

前穂北尾根のんびり山行 …… 萩本維都子 … 19

御在所岳 …… 山内教史 … 20

徳本峠 …… 国沢昭美 … 22

昭和57年度　冬山合宿報告 …… 24

序　　文 …… 川辺秀司 … 24

合宿計画 …… 川辺秀司 … 24

行動記録 …… 山内教史 … 25

昭和56年度　例会報告（7月～12月） …… 28

会員動静 …… 29

編集後記 …… 29

昭和56年度 夏山合宿報告

序　　文

星野辰也

今年度はややマンネリ化した剣岳を嫌って穂高周辺に舞台を移して夏山合宿を行なうこととなった。毎度のことながら、体力・技術・経験・トレーニング量・休暇の異なるものが一緒に入山して、そこそこの満足感をみやげに無事下山するのは、なかなか大変であり、また楽しみでもある。今回は女子及び新人を幸内氏が一手に引き受けてくれたおかげで、登攀隊は非常に行動しやすかったことは事実である。

今回の合宿で特に強調した点は、各ザイルパーティー共だれもがトップをリード出来るという事であった。トップが全ルートをリードし、セカンドはそれに続くのみといった形は、一部の新人を対象にした場合のみ意味があるので、今回はこの形はApply すべきでないと考えたが一部どうしても仕方なかった点は残念である。今後の努力に期するところである。

又合宿の度ごとに云われてきたことだが、1に体力、2に体力である。アプローチや下山中のつまらぬチョンボが目立った。今回登攀に参加した者は今度はいつか新人を連れて来るべき者であるのだから、あまりチョンボはしない事である。

昨今の岩登り技術は非常に進歩しており、又多様化している。かつて人工であったルートもフリー化されたり、半パン上半身裸同然で岩を登る時代である。しかしKACという会を通じて知り合った者同志が、山を媒介にして苦しくもあり又楽しくもある山行きを続けられるうちは合宿というものに参加して行きたいと思う次第である。

合　宿　の　概　要

登 山 地：穂高岳周辺

目　　的：A班　　中堅会員の登攀技術の向上

　　B班　　穂高岳周辺の概念把握と新人訓練

パーティ：A班　　先発隊　星野（L）、山本

　　後発隊　内藤，小林，川辺，山内，吉田

　　B班　幸内（L），野上①，萩本，国沢，久村，井上，小西

日　　程：A班先発隊　昭和56年8月8日～8月16日

A班後発隊　および　B班　昭和56年8月12日～8月16日

8月　8日（晴）　大阪発（夜行）～

8月　9日（曇）　松本～上高地～横尾～涸沢～北穂南稜

8月10日（晴）　滝谷：ドーム西壁・雲表ルート～ドーム北壁・左ルート

8月11日（曇後雨）滝谷：ダイヤモンドフェース・清水山岳会ルート～ドーム中央稜

8月12日（雨後晴）A班先発：北穂高南稜～涸沢～前穂北尾根五六のコル～奥又白池

A班後発およびB班：大阪発（夜行）～

8月13日（晴）　A班先発：前穂四峰正面壁　北条・新村ルート

A班後発：松本～上高地～徳沢～奥又白池

B班　　：松本～徳沢～長塀山～蝶ケ岳

8月14日（曇）　A班：前穂北壁～Aフェース（内藤、小林、山本）

前穂東壁右岩稜～Aフェース（星野、山内）

前穂東壁右岩稜・古川ルート～Aフェース（川辺、吉田）

B班：蝶ケ岳～常念岳～大天井小屋～西岳

8月15日（快晴）　A班：前穂四峰正面壁　北条・新村ルート（小林、山内）

前穂四峰正面壁　松高ルート（星野、内藤；川辺、山本）

登攀後　奥又白池～五六のコル～涸沢

B班：西岳～槍ケ岳～南岳～北穂高岳～涸沢

8月16日（晴）　A班およびB班：涸沢～横尾～上高地～松本～大阪

A　班　行　動　記　録

川　辺　秀　司

8月13日（晴）

人混みにあふれた上高地に着く。夏山最盛期である。

計画書を提出して、はやばやに出発し梓川沿いに明神岳、穂高岳の山々を眺めながら歩く。

徳沢園で休憩の後、縦走隊と涸沢での再会と互いの健闘を誓って別れる。新村橋を渡る。何度歩いても気持ちの良い橋ではない。

奥又白谷の河原から、河原の左側ブッシュ帯を歩いて、松高ルンゼ押し出しで昼食をとる。目の前に蝶ケ岳が見える。今頃縦走隊はどの辺まで登っているだろうかと話し合う。

松高ルンゼの右側尾根（中畑新道）を登る。急登である為、苦しい登りだった。やがて傾斜も落ち、松高ルンゼからの道と合流した後、広い斜面を前穂東壁や四峰正面を見ながら左上していと、奥又白池に着いた。

星野さんと山本さんが、テント場を確保し、 紅茶を作って首を長くして待っていてくれた。

8月14日（晴）

朝食後、前穂東壁目指して全員出発する。

今年は、残雪が多く、前日星野さんパーティーがA沢を下るのにかなり苦労したとの事。アイゼン，ピッケルを持って出発する。他のパーティーで、アイゼン，ピッケルを持ってこなくて登攀をあきらめた人もいたようだ。

奥又尾根より、本谷の雪渓をコンテでトラバースして、C沢を直上する。C沢上部から、前穂東壁を見上げれば豪快な壁だ。まだ誰も取りついていなく我々が一番乗りのようだ。

内藤さん、山本さん、小林さんが、北壁～Aフェースへ

星野さん、山内君、そして、吉田さん、川辺が、右岩稜～Aフェースにそれぞれ取り付く。

１１時登攀終了，前穂高頂上で全員集合。登攀を終えた後の爽快感はなんとも言えない気分だ。写真を撮り下山する。A沢はやはり感じが悪く、ピッケルやアイゼンを持っていない人もいるので、ザイルを3本結んで小林さんがトップで下降し、ザイルフィックスしてカラビナ掛けで、下降した。他の二人パーティーは、ビビリながら降りていた。

A沢を過ぎれば、奥又白尾根を池目指して一目散に降り、のんびりと酒を飲みまわす。

8月15日（晴）

今日が、一番人が多いだろう。池の回りがテントで一杯だ。

前日と同じ時刻に出発する。途中吉田さんの体調が悪くなり、テントに引返す。

北新ルートは、数組順番待ちで、今日は混みそうだ。小林、山内パーティーが取り付く。

松高ルートには、北新ルートの取り付きからトラバースして、内藤さん、星野さん、山本さんと川辺が取り付く。

松高ルート登攀終了後五、六のコルへ向かって北尾根を下り、五峰を歩いている時、北新ルートの登攀を終え四峰をトラバースしている小林・山内パーティーからコールがあった。

五、六のコルで、小林パーティーを待ち合わせ奥又白池に帰る。今日は、涸沢で縦走隊と合流の予定の為、テントを徴収して、五、六のコルから涸沢へ向かう。今日で奥又白とサヨウナラだ。

涸沢で縦走隊を、いま来るかと待つがなかなかやって来ない。そのうち、マイクでＫＡＣの呼び出しがあり縦走隊と知りあった人が、どんなに遅くなっても北穂から涸沢に降りると、知らせてくれる。

しかし、時間も遅いので南稜テラスでビバーグする事も考えられたので北穂小屋へ、電話すると、それらしき人達が小屋を通り過ぎていったとの事なので迎えにいく。南稜を登り、岩ばしごの見える所でしばらく待つが一向に見えず。あきらめて南稜でビバーグしたと判断して下山しか

けた時、かすかに岩バシゴの上部で光が見えた。コールをかけ合いお互いを確認し合流した。静まりかえった涸沢に着き、テントの中で話に花が咲く。

8月16日（晴）

朝食が出来るまで、涸沢ヒュッテ横の大岩でボルダリングのマネ事をしてあそぶ。

今日で、今年の夏合宿も終了。天候に恵まれ、中堅及び新人それぞれに良き経験を得て、今後の山行きのステップとなるだろう。

朝食の後、穂高の山々を後に、途中横尾山荘でタクシーの予約をし一路上高地へ下りた。

奥又白にて思う

内藤正司

夏山合宿に、久し振りに入山できた。それも奥又白の池にベースを置き、前穂高東壁や、四峰正面壁を狙う岩登り合宿である。今まで大きな岩壁を見ると、血が騒ぐはずの私自身、こんどの山行きに関しては、いささか冷静すぎた。いや臆病すぎた。それも入山する前に、3人目の子供が誕生したから、精神的にプレッシャーがかかったようだ。何が何でも、無事に下山しなければと言った気持ちが心の奥底に作用した事は事実だ。こんな気持ちは初めてだった。小生でも少しは変わったのかと思った。入山したとたん、むらむらする心が湧き上がった。あの天を登る前穂の岩壁と、奥又白の池のもつロマンに、しばし酔いしれていた。登山の基本は、自分の足で一歩一歩登って行く。そして初めて山の良さが判るもので絶対に忘れてはいけない事だ。言葉や頭で考えるより、やはり自分の身を現実にもってきてあれこれ感じるものだと。

いよいよ登攀の日、思ったより多量の雪渓に不安を感じながら、C沢を詰める。右岩稜を行くメンバーの無事を祈りながら、我々は北壁へと進む。Dフェースの基部まで雪渓があり苦労する。北壁の一ピッチ上でアンザイレンをする。ホールドやスタンスが豊富で快適で、楽しみながら登って行く。ぱっと開けた場所に出た。そこはAフェースの取り付きであった。上部ハングを仰ぎ見ながら、ザイルをのばせば前穂高岳の頂に達した。何とも言えぬ感激に心を酔わせる。これぞ登攀、仲間の助けで互いに喜びをわかち合う登攀精神を、3年振りに味わう。3人目の子供の名前を、美穂とした。

ザイルパートナーは、信頼の上に立つもの、生命をたくすもので、日常生活の上に於いても、人間的な結びつきの無い人とは、やはりパートナーとしてザイルを結ぶことは、小生はとても出来ないと思う。数多くの山行を行っても一つ一つの中身の濃さによって経験も豊かになり、ただむやみに数多い山行をするのは余り良いとは思わない。じっくり山と組み合って楽しみ、人生における何かプラスになる感激を味わってほしい。

青春とは　むなしいもの
されど　俺は闘志に燃える
生きている証しを　肌で感るために

滝谷：ドーム西壁・雲表ルート
～ドーム北壁左ルート

山本泰彦

8月10日（晴）　　パーティ：星野、山本

北穂南稜B.P.（5：50）―　雲表ルート取付（6：30～7：00）― 登攀終了（8：45）― 左ルート取付（10：30）― 登攀終了（11：40）

昨日は、みじめだった。横尾あたりでおかしくなり、バテバテで涸沢へ。大休止してそこから3時間もかかって16時30分に北穂南稜の幕営地についた。わずか28kgの荷物だというのに、体力のおとろえを感じる。そのせいか、C沢左俣を下っていてもどうもしんどい。

雲表ルートの1ピッチ目は、いきなり核心部。もろい岩に大きく足を拡いてフリクションをきかせ、15m直上し、A1でテラスに出る。黄色のコケがすべりそうでいやらしい。北西カンテがスッキリたちあがっている。チムニーを抜け嫌なトラバースをする。星野君がトラバースしやすいようにシュリンゲをセットしていてくれたので助かる。かぶった凹角を抜けると登攀終了点のドームの頂であった。

北穂の頂上へ遊びに行く。時間も早いので、あれ行こうかと、星野君が、目前にあるドーム北壁を指す。ほな、いきましょうか、ということで腰をあげる。1ピッチ目は、凹角から左のテラスへ。2ピッチ目、星野君は、AOで、ちょっとかぶっている所で、彼の息が荒らくなると、ふしぎなことに、下でビレーしている僕も同じように息が荒くなる。ザイルでつながっているせいだろうか？例によって彼は、かっこよくきめて視界からきえると、今度は、僕は実力相応にA1で、セコンドの気楽さか、口笛をふき、そして時々、股の下の景色を楽しみながら快適に登る。あとは、おおまかな1ピッチで終る。トカゲをしてからテントに帰る。

滝谷：ダイヤモンドフェース・清水山岳会ルート
～ドーム中央稜

山本泰彦

8月11日（曇のち雨）　　パーティ：星野、山本

ダイヤモンドフェース取付（7：10）― 登攀終了（9：50）― ドーム中央稜取付（10：10）― 登攀終了（12：20）

C沢左俣を丁度半分下って、ダイヤモンドフェースの取付であるハング下へ。手前で崩れていたところがあったので、ザイルを出すという。こちらの実力を心得ていて、安全第一に考えてのことだろう。いつも少し余分に荷物をもたされるが、このあたりが、リーダーとして信頼をよせるところでもある。

1ピッチ目は、顕著な凹角を登り、浮石に気をつけて登ると砕石のあるテラスへ。おかげでザイルが動くたびに落石の洗礼を受ける。2ピッチ目は、チムニーからカンテへ。星野君は、チムニーは、苦手とみえて、手こずっている。僕も苦手だ。でも、足で両方の壁につっぱっているのは、絵になる。パチリ、一枚。広いガラガラのテラスから左へむかってルートはのびる。核心部のスベリ台である。でだしが少しかぶり気味でぬれている。A1で左斜上し、あとは、アブミの掛けかえ。1本きいていないハーケンがあり、体重をかけないように神経をとがらす。左へふられると垂壁の空中遊泳だ。こういう所をトップで登るのは、さぞかし嫌だろうな。バンドから、草付を登ると登攀終了。

中央稜の取付は、目前だ。左手にみえるC沢左俣が、まるで登攀ルートのようにみえるほど、たっている。C沢の下降者が、だすのであろう落石が滝谷全体に大音響を発生す。中央稜の1ピッチ目は、凹角を登っていき、右へトラバースして、風の強いビレー点へ。この手前の岩は、少し脆い。2ピッチ目は、カンテ。細かいが、岩がかたいので快適。体が空中に飛び出る。20mブラブラ歩いて3ピッチの取付へ。星野君が、「トップで登るか。」という。少しぬれてはいるが、岩の硬い、大きな凹角。左のフェースを登り、最後は、かぶった凹角をA1で抜ける。アブミが回収できなくて、星野君にとってもらう。最後のピッチも凹角で、ホールドもがっちりしており、ホイホイ登れるので息が切れる。最後に乗越す所で記念写真を2枚とってもらう。細いホールドに立っているので、真剣そのもの。蒲田川が背景に写っているが、2枚目は、霧がでてバックは何もなし。滝谷の気象変化は、これほど早いのです。

ドームの頂で登攀具をしまっていると、パラパラ降りだした。今日も昼前にテントに帰ってノルマは、おしまい。中央稜の3ピッチ目以外、僕は、セコンドだったせいか、登攀をしたという充実感が得られず、何か満ち足りない中途半端な気持ちであった。

8月12日（雨のち晴）　北穂南稜（12：40）── 涸沢（14：00～14：20）── 南穂高岳北尾根五・六のコル（15：40～15：50）── 奥又白池（17：10）

四峰正面壁北条新村ルート

星　野　辰　也

8月13日（晴）　　メンバー：星野、山本

ＢＰ（6：30）── 取付（7：30～7：45）── 登攀終了（9：50）── 前穂四峰（10：20～10：40）── 前穂高岳頂上（11：30～11：45）── 奥又白池Ｂ.Ｐ.（13：00）

前夜より雨の為、予定は一日早め、滝谷より奥又白へ移動したため、本日は念願の四峰正面壁をアタックすることにする。奥又白も本日まで比較的すいており、アプローチものんびりしたものだ。Ｃ沢の雪渓をつめて、　取付点に到着すると先行パーティーがおりガックリする。しかし彼らはどうやら松高へ行くらしい。ラッキーなことだ。

山本氏とザイルを結び、まずは容易な、草付ガリー状の所を３ピッチほどリードする。後続の３人パーティーはノーザイルで登って来る。夏の混雑した岩場でチョット　ミスすればアウトなのに。よくやるよ！

ハイ松テラスは思ったよりかなり広い。ここらで一服して星でも眺めたら気分がよいことだろう。あまりノンビリ出来ないので、これより核心部のハングを目指す。ルートは凹状部分のハングを抜いているため、まったく威圧感がない。白っぽい、脆い岩を４ｍ登ると、１段目のハングで、ピトンも多数打ち込まれておりＡＯで越す。２段目も同様にＡＯで越す。ハング上部から右へトラバースして山本氏を確保する。山本氏はハング部で少々てこずっている。ここで消耗すると後がしんどい事になる。ようやく山本氏もハングを越えた。ここから右へトラバースして、カンテを廻り込む。高度感が素晴らしい。このピッチで実質的に登攀は終了であるが、一気に北尾根経由で前穂のピークへ向かう。

北尾根は岩屑だらけであるが、人力の力によりよく踏まれており、浮石はことごとく蹴落されかなり安全なルートになっている。特に三峰の登りのスラブはスッキリしており楽しい。又チムニー直下で韓国人のクライマーに会う、４人パーティーで日本の山へ遊びに来たらしい。チムニーでは、大学ワンゲル部員といった感じの新人がへばりついておりビクともしない。仕方なしに右側より廻り込み上部へ出ると、ここでアホな相棒が一生懸命叱咤激励している。さえないパーティーである。前穂はさすがに満員である。一服の後Ａ沢へ向かう。Ａ沢は上部までビッシリ雪渓でうまっている。ここで山本氏が少々ビビる。山本氏とアンザイレンして慎重に下降する。本日は後発隊との合流日なので奥又白池へガレ場を一気に下る。しかし待てども一向に後発隊はこない。続々と他パーティーが到着するなかで、狭い奥又のテント場を２つも確保しておくのは気がひけることこのうえない。どんなルートでもそこそこのペースで歩いてもらいたいものであると思った。

前穂東壁　右岩稜～Aフェース

山内教史

8月14日　　メンバー：星野、山内

右岩稜取付（7：15）―― 終了（9：15）― Aフェース取付（9：30）― 前穂高頂上（11：00）

いきなり取付から書くことにする。それまでのことは他の人が書いてくれるだろう。
C沢の雪渓が終った所で小林さんらの北壁パーティーと別れる。星野さんの指示で取付きらしいシュリンゲのぶらさがっている所まで登る。ここで登攀準備をして僕が先に2メートルぐらい登っていくと星野さんが「古川ルートにしては1ピッチ目がむずかしそう。」と言われるので元の所に降り、左へトラバースして行くと古川ルートの取付がある。前と同じように1ピッチ目は僕が登る。1．2ピッチはⅢ級なので気が楽である。2ピッチ目を星野さんがリードし、3ピッチ目のクラックを僕が登る。ここもスムーズに登り核心部のハングの下で星野さんをビレーする。下を見ると星野さんの下に、吉田さんが登ってきているのが見える。今日は僕らのパーティーが一番目に着いたので上にはだれもいない。

星野さんが僕の所まで登って来て、いよいよハングの突破である。星野さんがハングを登っているのを見ていると見ている方も真剣になる。ついに星野さんがハングをぬけたようである。僕が登っていくと、なんと星野さんのかけたカラビナに手がとどかないのである。強引に登ってやっとハングをぬける。あと簡単な所を登って行くと右岩稜も終りである。

一度北壁ルートに合流し1ピッチ登るとAフェースである。Dフェースを登っているパーティーがある。ヘルメットもかぶらず、クレージーな連中だと思っていたら、後でわかったのだが、このパーティーはあのハードフリークライムで有名なチーム・イカロスの桧谷清氏らだったのである。氏らはDフェース都立大ルートのフリー化を行ったそうである。しかし二登目だそうです。話がそれたが、Aフェースは1ピッチ目を僕が快適にリードし、2ピッチ目を星野さんがリードして、Aフェースも終わりである。終了点でザイルを巻き、少し歩くと前穂のピークである。
頂上には北壁隊の内藤さん、小林さん、山本さんが休んでおられ僕らも、川辺さんと吉田さんを待つことにする。川辺さんらが登ってこられると、記念撮影をして降りることにする。右岩稜を登れたことでうきうきしながら稜線を降りる僕だったが、あの恐怖のA沢の下降の恐ろしさを全然知らなかったのである。

一句できました。　「夏山をなめちゃいけない　雪がある」　おそまつでした。

前穂北壁～Aフェース

小林利樹

8月14日　　メンバー：小林、内藤、山本

北壁からAフェースは、前穂東壁で最初に拓かれた最もポピュラーなルートなので一度は登ってみたい所であった。

今年は例年になく雪も多く沢筋も残雪がびっしり詰まっている。C沢を詰めていき、途中からトラバースをしDフェースの下を通りながら上昇バンドを左へ上っていく。1ピッチ登ったところでアンザイレンをする。松高カミンも知らないうちに通りすぎてしまう。ここをすぎて少し行くと岩がアンサウンドしてもろくなってきた。T2で少し行動食をとりAフェースへと向かう。快適にAフェースを抜けて前穂の頂上に立つ。ここで残りの人達を待ち全員そろった所で幕営地のある奥又白ノ池に向かってA沢を下り今日の登攀は無事終了でした。

夏　山　合　宿

吉田典夫

昭和56年8月13日、14日

スポーツとは今まで縁の無かった僕が、まさか本チャンの岩へ行くとは思ってもみなかった。前から夏には北アルプスのポピュラーコースの縦走はやってたんだが、下界の暑さから逃げてのんびりする以外、別にこれといって目的はなかった。岩登りをするきっかけは、ひょんなことから野上さんと知り合いになったことから始まった。それまでも岩はやりたかったのだが、岩登り→「普通の人には無理」「技術、体力が要る」→やめとこ。「落ちたら死ぬ」→恐い。

ところが、はじめてみるとおもしろい。誰が考えたか知らないがシステムとしてもよく出来ている。会に入れてもらうまでは、野上さんの都合のつく時は連れていってもらい、そうでない時は岩登りの本を買ってきて自己確保の方法を覚えて、一人で妙号、保塁で練習をした。だが一人でやるには限界がありだんだんあきてきた頃、会に入れて戴いた。

会に入って、初めて本チャンらしい所が、小豆島拇指岳であったが、あいにくの雨で寒いだけで終わった。すっかり岩にやみつきになり、例会は皆勤賞。夏山の前穂右岩稜も〃やったるで〃と勢いこんだが、結果的には体力不足で川辺さんにひっぱり上げてもらうはめになってしまった。岩は技術もさることながら、体力第一を痛感。

初日、上高地から徳沢まではわいわい言いながら元気よく行ったのだが、それから奥又白の登りでバテてしまい、内藤さんに尻を押してもらう始末。ベースに着いて先発の星野さん達が作っ

てくれたミルク紅茶のうまかったこと。明日は右岩稜古川ルート（初めての本チャン）、えらいこっちゃなあと思いつつ、早々と寝てしまう。2日目、朝4時出発。例年に比べて雪が多いとのこと。アイゼンをつけて、アンザイレンしてB沢を登る。取付に行くまででもしんどい。右岩稜は、星野ー山内、川辺ー吉田の2組。B沢の途中から左上してトラバース取付をさがす。さすが本チャン、スケール抜群。足元のB沢がまぶしい。1ピッチ目を登り始めた頃、C沢にすごい落石。ふり返ると大きな岩が雪渓を落ちて行く。さすが本チャン、恐い。4ピッチ目のかぶりぎみのVAO，川辺さんトップ。僕は腕力が無くなり、アブミを出す。AOで行かなあかんのやけど。左側のルートでは星野ー山内組がハング帯をAOで越えて行き、上部へ抜けて見えなくなった。北壁の大テラスに出る。岩の墓場みたいだ。あとは、Aフェースを川辺さんにひっぱり上げてもらい前穂頂上に出たら、内藤さん他全員が待っておられた。アイゼンをつけてA沢を下降してベースに帰りつく。

夏　山　合　宿

幸内義孝

昭和56年8月12日～16日

パーティ：幸内、野上、萩本、涸沢、久村、井上、小西

最初の計画で、1日10時間という長い時間の歩行を、どうすれが解決出来るかということで、計画を変更することも考えたが実行することになる。

8月13日　　上高地（7：46）～徳沢（10：30）～長塀山（14：55）～蝶ケ岳（15：50）

上高地、天候もよく、梓川、焼岳が美しかった。何度来ても上高地は美しい。徳沢で登攀隊と別れ長塀尾根へと行く。ほとんど稜線付近まで樹林帯である。そこを過ぎるとお花畑だった。白山イチゲがいっぱい咲いていた。

8月14日　　蝶ケ岳（5：00）～常念岳（9：25）～大天井小屋（13：50）～西岳（（17：30）

西岳は目の前であるが、遠廻りして行かなければならない。近くの西岳まで吊橋が欲しい。表銀座と呼ばれる道、人もいなくて、何とすばらしい山行かと思いました。でもだんだん暗くなって行き、早く予定地へと思う気持ちもありました。

8月15日　　西岳（5：00）～槍ケ岳肩ノ小屋（9：30）～南岳（14：20）～北穂小屋

（18：40）～涸沢（22：30）

5時出発。地の底へと下って行きます。だんだん槍ケ岳が高くなって行き、天を突くように立って黄金に輝いて美しい。人の多い槍登頂を終え南岳。今日もいい天候に恵まれ幸せである。今度の山行の目玉がこれからである。最低コルがなかなか遠い。小屋が見え北穂頂上。もう空はうす暗い。もう下るだけだ、と思いしや暗くなった。登攀隊が迎えに来てくれた時は、うれしさでいっぱいだった。友はありがたいと思う。でもみんなよく頑張ったよ。月の光の中を足をふらつかせてみんな、思い出の山行きとなったろう。反省も多くあるだろうが、これからの山行のデータにして下さい。

8月16日　　涸沢（7：00）～上高地（12：00）

夏山合宿に参加して

井　上　雅　代

今頃、穂高はどんな姿に変化しているでしょうか。

大阪駅を出発して夜行列車に乗りこみ松本駅につき、タクシーで山間にはいっていった頃、ふと明るい日ざしがさしている山が見えた時の感動は、忘れられなかった。そして長い長い縦走がはじまったのです。徳沢で登攀の人たちと別れ、縦走班は蝶ケ岳をめざして進んでいきましたが、長塀山の樹林帯からなかなかぬけられず一人まいってしまったようだが頂上に着いた時、この山の名をつけた方の気持ちがわかりました。左に穂高連峰を望みながら蝶ケ岳ヒュッテに着いた頃山に来ているんだという実感がわいてくるのでした。何も知らないものですから御飯は、はんごうでたくものだと思っていたのにおなべでたいていたのでビックリ！　もう一つ早寝早起きにもビックリ！　〃早起きは三文の得〃という諺に納得、なぜならば、午前3時頃の空には手のとどくようなところに無数の星があるではありませんか。槍ケ岳に登る人が多いのに圧倒され狭い頂上で人が、ひしめきあっているのが印象的だった。長い縦走のなかで30分歩いて5分休憩がきっちりとあったことはとてもうれしいことであった。この合宿のハイライトであった。「キレット」私にとっては、ガスが出ていて下の方がはっきり見えなかったことで少しは恐怖感も薄らいだようでした。しかし北穂にさしかかり体力の限界がやってきたのでした。みなさんに荷物を持ってもらいダウンした私のペースにあわせてゆっくりと目的地〃涸沢〃へと進んだ。この時もう太陽は沈んでいたが運よく月の光の下で地面はいく分か明るかった。何もいわずに気を使って下さったことを深く感謝しています。しばらくして、登攀の人たちがむかえに来て下さった時はともかくうれしさでいっぱいでした。〃涸沢〃に着いたときはもう午後10時になっていたことがわかって驚きましたが、目的地についてひと安心。

夜とうって変わって朝、涸沢から見た北穂、奥穂、前穂が美しく輝いていました。「なんてきれいんや……」

最後に、いろいろ迷惑をかけ面倒をみて下さってありがとうございました。

昭和56年度　個人山行

大台・東ノ川

山本泰彦

昭和56年7月17日～19日　　パーティ：山本、堀田、（戸田）

7月17日（晴）　大阪―大和上市―池原（16：45）―薬師湯（18：00）

5月に大峰、白川又川へ行ったので、今度は大台へ行くことにする。

大和上市のうだるような暑さにくらべ、山里の池原は、夕立のあととはいえ、ひんやりしている。ここでタクシーを手配するものの、いずれも、ていよく断られ、バス停近くの方に頼みこんで、池原ダム・坂本ダムに沿った悪路を薬師堂まで乗せてもらう。川のへりに、ちょっとした砂地をみつけB.P。

7月18日（晴）　B.P（5：40）―白崩谷出合（6：40～6：50）―地獄釜滝（9：30）―昼食（11：00～11：45）―B.P.（13：10）

幅10mほどの川を何回も横切って溯行開始。天然プールの深い淵が、次々とあらわれる。

蝮2匹、やりすごしてから右岸の捲き道に入る。長瀞をまいて下りついた所が白崩谷出合。

ここでイワナ釣師の一行を追い抜く。川幅も狭くなり、岩石が多くなる。腰とか、胸までつかる個所もある。アメ止メの滝（20m）は、巨岩のなかをすさまじい水量で流れおちている。

右岸を捲いていると太い蝮に会う。谷は、巨石に埋められ、その間を水が流れている。高さ10mほどの岩の積木をくぐったり、チョックストーンのオーバーハングを乗越したり、仲々楽しい。対岸高くには、大蛇嵜も望まれる。谷が折れると、地獄釜滝（30m）が、すいこまれそうな深い釜に落ちている。ここは左岸を捲いて、落口に出ようとすると急に尻の何ケ所かに痛みが走る。アブか？ハチか？川の中へとびこむ。皆、相当ささされたようだ。全身が痛く、かきむしりたくなる。ここからも、チョックストーンをいくつも越す。

天然のプールで昼食にする。戸田さんの冷しラーメンをごちそうになる。水につかっていると痛みもやわらぐようだ。ガイドブックにかいてある4つの大岩、最後の大岩は右を大きく捲く。谷にもどった所で、いい天然プールとキャンプサイトがあったので、ちょっと早過ぎるが、B.P。コールドビーフと超高級ウイスキーを飲んでは泳ぎ、そして、こうら干し。まことに優雅。今頃、夏の縦走路を歩いている諸兄、御苦労様ですなあ。

7月19日（曇）　B.P.（6：00）— 西ノ滝（6：20）— 高倉滝（8：20）— シオカラ橋（10：00）— 大台駐車場 — 大和上市 — 大阪

西ノ滝は幅広い岩壁を水が、流れ落ちている。奥には、中ノ滝も見えている。いずれも100m以上ある名瀑である。シオカラ谷に入ると、やっと沢らしくなる。くの字の滝は左岸を大きく巻く。巻いていると、西ノ滝の全ぼうが望まれる。千石嵒は、ブッシュも少なく、すっきりした大岩壁である。堀田君は、小太郎岩より大きいという。5、6mの小滝をどんどん越えていく。高倉の滝を過ぎた所に、大きな釜のある2mの滝がある。釜を泳いでとりつくも、2人とも失敗。東の滝で初めてザイルを出す。左岸の壁を40m登ると、そこは、滝見道である。

そのまま、シオカラ橋まで行くと娘さんがいて、香水のにおいがただよっていた。

小　荒　井　沢

幸内義孝

昭和56年7月24日～26日　パーティ：星野、幸内

（コース）大荒井沢→小荒井沢→空木岳→南駒ケ岳→越百岳→烏帽子岳→伊那

駒ケ根よりタクシーで養命酒工場。裏手より川沿いに入り、砂利の中を2時間半歩く。ものすごく大きい堰堤に着く。左岸を巻き林道に入る。ハシゴを登り堰堤の上に立つ。16：00大荒井沢出合。テント場。明日の100m滝が目に浮かび、ねつけぬ夜であった。次の日、次々と滝が現れる。右に、左にと登る。さあいよいよ大滝である。だが行けども滝は現われない。まちがったのだ。ついに沢はなくなる。薮の中を右へ右へと巻く。右側に沢が現れる。食事をして再び滝を登る。空木小屋前に着く。南駒ケ岳は道もよいが、南駒を過ぎると薮で道からはずれそうになる。樹林帯ではしょっちゅう膝を打つ。目から火が出そうだった。笹の中で一泊して、次の日、烏帽子岳を越えて伊那へと下った。

滝　谷

山内教史

昭和56年7月21日～24日　パーティー：川辺、山内

7月21日（晴）　上高地（7：45）— 横尾（10：45）— 涸沢（13：10）— 南稜テラス（15：10）

上高地からゆっくり歩く。今年は本当に雪が多いようで、奥又も本谷の末端から雪がついている。涸沢の雪渓をジョギングシューズで登って行くとだんだん雪がシューズにしみて来て、大変つめたい。南稜へ登って行く途中でポリタンに水を入れて運ぼうとするが、重たいのでバカバカ

しくなりやめる。なにしろザックの中にはウイスキーボトル一本分と日本酒1．8ℓ入っているから……。

南稜テラスに着き、テントを張ると雨がふってきた。明日のことが心配になる。

7月22日（くもりのち雨）

クラック尾根（9：00―11：45）

第一尾根を登るつもりがクラック尾根を登ってしまった。全くドジであった。北穂の頂上で川辺さんをビレーしていると、一般登山者が20人ぐらい集まってきてびっくりする。

ドーム北壁左ルート（13：00―15：00）

雨がふりだし取付点がわからず、縦走路をうろうろする。ガスの間にやっと見つけることができた。終了点にはアルミ板の立派なビレーポイントがあり、感心する。

テントにもどると又雨がふりだした。昨日もそうだったが、今日も雨水をポリタンに集める。30分くらいで10ℓのポリタンがいっぱいになる。

7月23日（くもり）

ダイヤモンドフェース（8：30―11：00）～ドーム中央稜（11：30―13：00）

C沢左俣を下る。取付点に移る所で岩がもろく神経を使う。ルート図では1ピッチ目はA1だが川辺さんも僕も、フリーで登る。すべり台状フェースでビビる。

ドーム中央稜は岩もしっかりしており、大変快適に登ることができた。快適すぎてセカンドにまわると息が切れる。最終ピッチ、大空めざして登って行く川辺さんがかっこよかった。

ドーム北西カンテ（13：30―15：00）

A1で登るだけのルートだった。

アルコールが底をつく。

7月24日（晴）

ドーム西壁雲表ルート（7：30―10：00）―上高地

1ピッチ途中から人工で登る。5ピッチ目はクラックを登らずに小ハングを人工で登る。

これで今回の山行きも終わりである。あとは松本におりてビールを飲むだけである。

◎　感　想

僕は今回が初めての本番の岩登りだったし、川辺さんも初めての滝谷だったので取付がわからなかったり、ルート図とにらめっこばかりしていたような山行だったが、結構楽しかった。ただやはり初めてだということで後から考えてみるとフリーで登れたという所を人工で登ったりして、

少し反省している。又、滝谷に行く機会があったら、まだ登っていない第一尾根、C沢右俣奥壁、グレポンなど登ってみたいと思っている。

そしてもう一つ反省することは、アルコールが少なかったことであろう。23日の夜にはアルコールが底をつき、最後の一滴が入った、コッフェルを僕が足でけり、テントに流してしまうというドジをやってしまった。その夜は、またしてもカープが負けるし、大変陰気でした。

笠　ガ　岳

米沢典之

昭和56年8月13日～16日

無届け（神戸山岳会への）の単独山行ですが、一般ルートですので何とかお許し下さい。此春槍沢でバテましたので、体力のテスト、並びにどれ位単独で連続して車の運転出来るかを試してみました。

8月13日（木）神戸（18：00）— 阪神高速 — 名神 — 北陸自動車道 — 富山 — 41号線 — 神岡 — 新穂高温泉

8月14日（金）　新穂高温泉着（5：10）但し途中尼御前で3時間仮眠、実所用時間（約8時間）13日、名神の停滞甚だし。新穂高温泉発（6：10）（中崎山荘で入浴着替え）— 左俣 — 笠新道入口（7：30）— 杓子平（14：10－15：00）— 稜線（16：00）— 笠ケ岳小屋（17：30）泊

8月15日（土）　笠ガ岳小屋（4：30）— 頂上（4：50～5：30）— 小屋（6：30）— 大ノマ乗越（10：30）— 小池新道経由新穂高温泉（15：30～16：30）

往路と同じく富山経由神戸

8月16日（日）　神戸（1：00）　所要時間（8時間30分）　米原附近で1時間の停滞あり。往復987 km。

職業柄、何時山行出来るか予定出来ません。此度は、たまたまお盆前より患者が少く、気になる重症者もいなかったので、従業員の要望もあり、開業9年目にして初めてお盆を休診にして急拠飛び出しました。会員の宮松氏には一切を話してから出ました。アルバイトの量としては、車の運転と登山とは半々でした。

氷ノ山・八木沢左俣

山本泰彦

昭和56年8月30日（曇）　　パーティ：山内、吉田、萩本、山本

F1（6：00）―不動滝上部（8：30）―F7下部（9：40～10：00）―奥の二股（11：00）―氷ノ山頂上（12：20～13：10）―B.P.（14：30）

夏山合宿前から約束していた八木沢へ山内君の車で行く。途中でビールを調達して、夜中に福定へ。氷ノ山林道の橋を渡った所で幕営。

F1（15m）；斜瀑なので、山内君は左岸を、僕らは、右岸を登る（Ⅲ級）。すぐ上に古い堰堤がある。これもなんなく越えて、クランク型に谷をまわると、ゴルジュとなり、第1の核心部F2（50m）。左岸の右寄りに取付き、20m登ってから右へトラバース。このトラバースはスタンスが外傾しているうえに、ヌルヌルでV級。トップの山内君は、よく登ったものだと感心する。滝によった所でピッチを切る。ここからは、水際の草付を登る（Ⅲ＋級）。すぐに釜があり、左手から二条のF3（40m）斜瀑。真中を登る（Ⅱ級）。続いて3段のF4（30m）右岸を登る（Ⅲ級）。50mもいくと、大きな釜をもった本沢の最大の不動滝（35m）が、80度くらいの傾斜で落ちている。左手の凹角状を登る。いまにも、はがれそうな草付と外傾したスタンス（Ⅳ＋級）。山内君は、本当に、うまいなあと吉田さんと一緒に感心する。不動ノ滝上部は、小さな平凡な流れとなる。積雪に押され、横に成長した木が、沢の上にかぶさり歩きづらい。二股を左へとり、なおも進むと、5mの小滝、上部に、F6（10m）が流木を抱いて、垂直に落ちている。山内君は、シャワークライミングで中央突破。僕らは、左岸を直登（Ⅲ級）。2段のF7（30＋10m）下部は、左岸の階段状をシャワークライミングした後、嫌な草付を直上する（Ⅲ+級）上部は、二条にわかれている。萩本さんは右手を、僕らは左手を快適に登る（Ⅲ級）。（コケがついていないのは、この滝だけです）すぐにF7（15m）で右岸の階段状のところを登る（Ⅲ級）。適当に歩いていると、流れもほとんどなくなり、奥の二股（わかりにくい）である。ここで登攀具をしまい、登山靴にはきかえる。涸れた沢をどんどん高度を稼ぐと、最後は、スズ竹の密生地にぶつかる。ヤブコギして50mも行くと頂上直下50m地点で、立派な登山道に出た。どんよりした但馬の空であったが、扇ノ山まで見えた。

屏風岩・一ルンゼ

吉田典夫

昭和56年9月13日～15日　　メンバー：小林、川辺、山本、山内、吉田

9月13日（雨のち晴）　上高地（6：00）～横尾（9：10）～1ルンゼ取付（10：50～11：40）～チョックストンの下（13：00）～緩傾斜帯の下（17：00～18：00）～ビバーク地点（21：00）

上高地より歩き始め、徳沢あたりまで来ると小雨がふってきた。神戸を出た時から天気は余りよくなく、雨になるのも予想していたが幸いすぐにやんだ。横尾岩小屋正面の川を渡った所、1ルンゼ押し出しにテントを張る。この川を渡る倒木の丸木橋が雨に濡れて見るからに滑り落ちそう。丸木にまたがってこわごわ渡る。（岩登りより恐い）。雨が降ったので登れる状態かどうかわからないが登攀用具、ビバーク用具を持って取付まで行ってみる。ここで北尾根縦走組の萩本、国沢両名は引き返し横尾から涸沢へ向かう。山内ー小林ー山本、川辺ー吉田で組む。最初、正規のルートは先行があったので山内君が左側のかぶり気味の所を登る。かなりシビアそう。1ピッチ目のフェース登攀中、吉田が川辺さんのカラビナを回収中に落してしまう。時々、上部で「ラク！」のコールがあり、しばらく間をおいてから小石が岩にはね返りながら飛んでくるが、ほとんどが右の本流にすい込まれていく。さすが落石の多いルートだけのことはあると気を引きしめる。内面登攀が多く、しかもホールドは丸く、その上、雨に濡れているので滑りそうでいやな感じだ。底の固い登山靴なんかで来るんではなかったと後悔する。フェースの左のクラックを登りテラスに出る。次のピッチは本当なら本流に沿ったフェースを行くのだが、それより左の浅いクラックを上る。山内君が両足をつっ張って難なく越える。登山靴ではつっ張りが効かない感じがして渋ってしまう。T4へ続く横断バンドのあたりまで来ると雲稜ルートの取付扇岩テラスで煙があがっているのが見える。上部がつかえている為、ブッシュを燃やして焚火をし早々とビバークを決め込むグループであろうか。さすが人気ルート。このあたりからが核心部。内面登攀の連続でしかも傾斜がきつく雨で濡れている。後続の2人パーティーには申し訳ないが待ってもらう。先行の山本さんが僕の為にシュリンゲを残してくれているが、それすらなかなか手が届かない。横断バンドから1ピッチ登った所に大きなチョックストンがある。川辺さんが先に越え、続いて僕の番だが腕力もなくなり苦戦する。チョックストンを越え、その上のハングがまた悪い。ハングを右にまわり込むようにして越えて行くのだが、体が振られてうまく行かない。結局、ハング下のハーケンにシュリンゲをかけ足を入れて乗っ越す。このあたりで核心部が終わり、草付スラブ、ガレの傾斜帯になる。大分体力を消耗する。下の2人パーティーは、大チョックストーンの下でビバークに入ったのだろうか見えなくなった。あたりも暗くなりヘッドラをつける。今日中

に屏風尾根まで出たいと思い行動を続ける。スラブ帯の左はしのルンゼ状の所にルートを取り、登るが足元はガレ場で歩く度に石を落してしまう。下の2人パーティーにあたらねばよいが。あたりは真っ暗になり、ヘッドラを頼りに動く。山内君、小林さんがスラブ帯をトップで登り、ザイルを固定し1人づつビレーポイントまで登る。歩く毎に石は落ちるし、ピンの効き具合ももう一つだ。その上、先行パーティーが落すのであろうか、時折火花を散らしながら石がふってくる。思わず体を伏せる。ザイルが1本、端から5m位の所で切れかかっているのを発見。午後9時。ついにビバーグに入る。シュラフにもぐり自己確保し、ツエットをかぶる。時々、風でツエルトがめくれ上がり冷たい風がふきこむ。寝るともなく、起きるともなく夜明けを待つ。夜明け頃、全員寝込んでしまう。

9月14日(曇)　ビバーク地点(7:30)── 登攀終了点(8:30～8:50)── 屏風の頭(9:15～9:25)── 涸沢(10:45～11:20)── 横尾岩小舎B.C.(13:15)

小雨の音で山内君が目をさます。周囲を見ると意外に傾斜の緩いスラブ帯であることがわかる。出発の用意をし、傾斜帯を登り草付を60mほどトラバースし、さらに灌木帯を直上し尾根に出る。昨夜、無理をして行動していたら、草付60mのトラバースが出来なかったような気がする。終了点8時30分。屏風の頭を経て涸沢経由で帰る。涸沢で食べたおでんがうまかった。今回の山行きで、体力不足からパーティー全員に御迷惑をかけ申し訳なく思っています。

9月15日(晴)　横尾岩小舎(6:50)── 上高地(9:40)

前穂北尾根のんびり山行

萩　本　維都子

昭和56年9月13日～14日　パーティー：萩本、国沢

9月13日(雨のち晴)　上高地(6:00)── 横尾(9:10)── 1ルンゼ取付点(11:00)── 涸沢(15:00)

夏合宿のあの苛酷な山行(今から考えると、恐ろしい！)の最終日、涸沢から見上げた北尾根の美しくそびえる峰々、感激ひとしおでした。次はあそこへ行こうと、国沢さんと約束する。9月の連休、2泊3日の予定で屏風岩パーティーと共に大阪を出発。松本からタクシーで上高地へ入る。くもり空で雨がふりそうだ。皆でわいわい話しながら横尾に入る。初めの予定ではパノラマコースを行くつもりだったが、新村橋で多数決を取った所、「雨がふりそう」「夏はしんどいだけで、景色は見えないで」の意見多数のため、あっさり変更。時間があるので、1ルンゼ取付点まで、屏風岩を見に行く。なつかしいなあ……。ここで見送った後、のんびり涸沢に入る。

9月14日（曇）　涸沢（5：50）— 5、6のコル（7：00）— 4、5のコル（7：50）— 3、4のコル（8：40）— 3峰頂上（11：00）— 前穂頂上（11：30）— 岳沢ヒュッテ（15：10）— 上高地（17：00）

朝5時50分出発。5、6のコルめざしてひたすら登る。私はすでにバテぎみ。お国ちゃんは元気そのもの。常に私の10m先を行く。待ってくれ!!　7時、5、6のコル着。やはり狭いコルで、目の前に細い5峰の登りが、ガスの合間に見える。難なく5峰を抜け4峰を越える。ガレガレでルートファイディングが必要だが、前を見て注意深く登って行けば、余りまちがう事はなかった。要するにどこでも行ける感じ。3、4のコルに着くと、何とそこは人間でいっぱい。まるでアルプス銀座の様であった。こりぁ時間がかかるなと思う。ザイルを出し、登攀の用意をして待つ。他の人達もイライラして順番争いで殺気立っている。こんな山の中で人間がケンカをするのは、余り良くない事です。しかし、のんびりしていると、パッと横から入られるので、こちらもやはり殺気立ってくるのです。3峰の取付すぐの凹角がいやらしい。あっさり逃げて、右のカンテを登ると目の前に3峰のチムニーが見える。が、近づいてみると、デッカイチムニーで、中は階段になっていた。それを登ると2つ目のチムニーがあるが、これは左手のフェースを登る。クラックの中に浮き石があって、恐くて乗れないので右のハーケンに移りたいのだが、これがちょっと渋い。思わずお国ちゃんの顔を見る。何とか乗り切って3峰を越え、2峰をめざす。次の山場は、2峰の下りだが、よそ見すると切り落ちているので恐いが、さほど難しくない。11時30分、ついに前穂頂上に立つ。やった！　頂上は長く広く、ガスっていると方向音痴になる。特に雪がつくと非常に下降路がまちがいやすい所だ。まだ1日予定があるけれど、バテぎみなので岳沢を下る。これがうんざりする程長い。やっとのことで上高地に着く。今回の山行は、全くノルマなし、気負いなしの由由な山行でした。気の合った友と、自分達の技量にあったルート。本当に楽しい山行でした。

御　在　所　岳

山内教史

メンバー：萩本、吉田、国沢、山内、井上

10月9日

湯ノ山温泉に近鉄の最終で着く。そこからタクシーで登山道の取付まで乗り、10分くらい歩いた河原にテントを張る。さっそくテントを張り、中で酒を飲む。だんだん酔ってきて、萩本さんと対等に話せるようになってくる。明日のことがあるので10日の午前1時くらいにシュラフに入る。

10月10日（晴のち曇）　前尾根登攀

テントをたたみ、藤内小屋の上の河原まで歩き、又そこでテントを張りそこで登攀準備をするここからすぐ右手に堀田さんが苦労したという〃うさぎの耳〃と言われる岩がある。確かに内傾したクラックがあり、相当腕力が要りそうである。

ここから川を渡り、登山道を登っていくと藤内壁と書かれた看板があり、そこから藤内沢に入っていき、少し登っていくと右手に前尾根の取付がある。パーティーは僕と萩本さんと井上さんで組み、もう一組吉田さんと国沢さんと組むことにする。取付には先行パーティーがいてトップが登っているところだった。このパーティーの後に僕が登る。少しかぶったクラックを抜け、少し登ると1ピッチの終わりである。萩本さんと井上さんに同時に登ってもらう。

1ピッチ目が終わり少し歩くと2ピッチ目の始まりである。2ピッチ目はスラブの登攀である。3ピッチ目は傾斜のゆるい凹角を登り、4ピッチ目はクラックをレイバックで登る。5ピッチ目はヤグラと呼ばれるピークを登る。最初はレイバックで登り、かぶったコブをつかんで懸垂するところがおもしろい。やはり脇力の弱い？女性軍はだいぶ苦労したようである。やはり岩登りはパワーである!!

ヤグラを登ると下降路に添って藤内沢の方に降りる。沢づたいに降りて行くと前尾根フランケが沢側に見える。少しかぶり気味で人工ルートのようである。そのまま下って行き、一ノ壁を登ることにする。一ノ壁の基部でおそい昼食を食べザイルを僕と吉田さんで組み、あと女性軍だけで登ってもらうことにする。僕達は最初の2ルートと呼ばれるルートを登り、その次に正面左トラバースルートを登った。萩本さんらは1ルートと呼ばれるルートを登ったようである。2ルートはクラックを登り、正面左トラバースルートは一ノ壁の右の方から左の方へトラバースしていくルートでそんなに難しくはなかった。グレードは両方Ⅳ級。

これで今日のところはテントに帰ることにする。萩本さんが用事があるので今日下山されるそうである。その夜テントの中は大変静かであった。……？

10月11日（くもり）　中尾根（途中でエスケープ）── 一ノ壁

今日は国沢さんと井上さんが一般道から御在所岳へ登られるので、僕と吉田さんとで中尾根を登ることにする。昨日と同じように藤内沢を登る。そして昨日前尾根から降りてきたルートを登る。マイナス滝のところに来るとその滝を登り少し左へトラバースすると中尾根の取付である。取付のテラスに来てみるとなんと10人くらいの人が順番を待っているのである。しかたがないので、ここで待つことにする。1時間30分してやっと順番がきた。まず僕が登る。クラックをジャミングで登って行くとクラックが広くなってきて、ザックがじゃまになり登れなくなる。しかたがないのでザックを肩からはずし、ハーネスにつけて登る。25メートル登ると1ピッチ目の終わりである。

2ピッチ目の取付へ行ってみるとここにも人がいっぱいである。もうすでに時間は、10時30分くらいになっているし大変混んでいるので、吉田さんと相談して、中尾根はやめにして一ノ壁に行くことにする。2ピッチ目の取付から左へ回りこみ懸垂でツルムのコルへ突き上げるルンゼに降りる。ルンゼを少し下って行くと一ノ壁の基部の右端に着く。

一ノ壁で登ったルートは、ダイレクトルートと3ルートである。ダイレクトルートは割合むずかしく、フリーで登ろうとがんばるがピンをつかんでしまう。上部はクラックのレイバックでダイナミックな登攀ができる。

3ルートは下部のクラックがポイントであろう。上部は簡単である。ルートグレードは両方ともV級である。

時計を見ると1時45分である。2時にテントに帰る予定だったのでザイルを巻いて降りることにする。テントに着くとちょうど2時であった。

徳　本　峠

国沢昭美

昭和56年11月1日ー2日　　パーティー：小林、国沢

11月1日（晴）　島々宿（6：30）—二股（8：00）—岩魚止小屋（10：10）—徳本峠（13：10）

11月ともなると登山客はめっきり減って、バスの乗客は旅行姿の若い女性が目につく。今度は、あんな格好で上高地へ行って帝国ホテルで優雅に長期滞在などしてみたいなあと思ったりする。島々宿でバスを降り、島々谷に添って林道を行く。朝の空気が清々しくて気持ちが良い。樹々の色は、秋の盛りを過ぎ冬の訪れを知らせてくれる。上高地へバスが開通するまで、人々が越えた峠への道を私も歩いているのだ。二股から南沢へ入るとすっかり山道らしくなってくる。しばらく行くと、戦国時代に豊臣秀吉の軍勢に追われて逃げのびてきた飛弾の領主、三木秀綱の奥方が島々谷で命を落としたと記された碑や、所々説明板も設けてある。また古びた石垣なども残っていた。炭焼き釜の跡らしい。牛なども荷を運ぶ為、この沢へ入ったという。昔はこんなに整備されていなかったことだろう。杣人達の生活の道だったのだ。タイムトラベルをしているような気分になる。落ち葉の敷きつめられた道は、ひっそりとして登山者の姿もまばらである。歩くと板が落ちそうな苔むした木橋や桟道を幾度か渡る。岩魚止小屋は、陽だまりの中にあった。ひなびた昔ながらの小屋である。名前のひびきが素朴で、一度来てみたいと思っていた。風に巻きあげられた木々の葉が、秋の陽ざしにきらきらと輝いて、狭い谷間一面にまるで幾万匹の蝶が舞っているようであった。あくまでも静かで、時間が止まっているような錯覚に落ちてしまう。小屋を過ぎてからも、ゆるやかな登りが続く。肩のザックが少々重く感じ始めた頃、ジグザグの最

後の急登に入る。ゆっくり休まずに、一気に登ってしまう。穂高の岩峰が目にとびこんで来る。

11月2日（雨）　徳本峠（7：00）―白沢出合（7：50）―上高地

昨夜は満天の星だったのに、今にも降り出しそうな空模様である。朝焼けに輝く穂高を見るのを楽しみにしていたのに……残念。早速にツエルトを片づけ出発の準備にかかる。白沢側の道は雪で真白である。滑らないように注意しながら下って行く。途中から雨が降り出し、上高地に着いた頃には、風雨激しく中尾峠越えは止めることにする。峠を1つ越えただけだったけれど、いい山の思い出がまた1つ出来ました。この次、上高地へ来る時も、やっぱり山の格好で来ることにしよう。

昭和57年度 冬山合宿報告

序　　文

川　辺　秀　司

今回の合宿は、当初、黄蓮谷左俣、黒戸尾根、戸台からの三パーティーで甲斐駒ケ岳、仙丈岳の合宿で立案されたが、計画の検討段階で黄蓮谷左俣のパーティーの力不足が懸念された為中止にし、黒戸尾根と戸台からの二パーティーで新人に初歩的な冬山登山の経験を積ませ今後の糧となるような目的で計画された。

しかし、山行前になり新人がいろいろな理由により不参加ということもあり、今ひとつ盛り上がりにかける合宿になってしまった。

今冬の南アルプスは、きわめて天候が良く冬山登山とは、ほど遠い山行になり、物足りなさをメンバーの中には持った人もいたと思うが、今後も個人山行等を通して登山技術を向上させて良き山行をしようではないか。

合　宿　計　画

川　辺　秀　司

登 山 地 ： 甲斐駒ケ岳、仙丈岳、アサヨ峰

目　　的 ： 積雪期の登山技術の向上

期　　間 ： 昭和56年12月30日 ～ 昭和57年1月3日

行動予定 ： 12月29日　A　班　大阪発（ちくま5号）

30日　A　班　非崎 ― 白須 ― 駒ケ岳神社 ― 五合目

B　班　大阪発（ちくま5号）

31日　A　班　五合目 ― 駒ケ岳 ― 仙水峠 ― 北沢峠

B　班　伊那北 ― 戸台 ― 北沢峠

1日　A.B班　北沢峠 ― 仙丈峠 ― 北沢峠

2日　〃　北沢峠 ― アサヨ峰 ― 北沢峠

3日　〃　北沢峠 ― 戸台 ― 伊那北 ― 大阪

（1月3日予定のアサヨ峰をカットし、1月2日下山した）

パーティ　A班　川辺（CL）　小林（SL．気象）　山内（装備、気象）

B班　矢木（CL．食料）　内藤（SL）　国沢（会計）　迫田（装備）
岸本（OB）

行　動　記　録

山内教史

12月30日（晴）　大阪発（前夜22：20）— 日野春 — 尾白キャンプ場（8：15－8：30）— 標高1881m（12：15）— 刃渡り（12：40）— 五合目（14：00）

29日ちくま5号に乗りこむ。大阪駅のプラットホームで小西さんの見送りを受ける。これが僕の見た彼の最後の姿だった。あんなことになろうとは夢にも思わなかった。

30日塩尻でちくまを降り、新宿行きの普通列車に乗り、日野春で降りる。そこからタクシーで尾白キャンプ場まで行く。ここから駒ケ岳神社を通り尾白川を渡って、登山道に入る。

まだ最初の方は全く雪がなく、夏の水場の手前ぐらいから道のところどころに氷が張っているようになる。水場の所は、一面の氷で行手をはばまれる。川辺さんと小林さんが慎重にそこを渡るが僕の番でころんでしまう。ここで休んでいた朝霧山岳会の人達の笑いを誘う。

このあたりから雪も道に表われるようになる。ここからが地獄の一丁目で踏みかためられた雪は、よくすべり、すべらないように歩こうとすると、相当な体力を要するのである。先行パーティーも相当苦労しているようである。途中でこのパーティーを抜き、少し歩いたところでアイゼンを着け、昼食にする。やはりアイゼンをつけると余分な所に神経を使わなくてよいので楽である。刃渡りの通過は、慎重に歩けば、どうという事はない。ここからははしごを登るのが多くなる。これが結構しんどい！はしご登りが終わると黒戸山のトラバースである。

トラバースをして行くと、八合目までの稜線が見えるようになる。「稜線も雪が少ないなあー。」と思いながらコル目指して降りて行くと五合目の小屋である。小屋もすいているし、テントを張るのもめんどうなので小屋に泊まることにする。（小屋は二つあり、僕等は上の小屋を使用した。）小屋の中は、ほとんどが黄蓮谷クライマーなので小屋の隅の方で小さくなっている僕達黒戸チームでした。

小西さんのさし入れのウイスキーをいただく。

12月31日（くもり後雪）

A班　五合目（6：15）— 七合目（7：15）— 八合目（8：30）— 甲斐駒ケ岳頂上（9：50）— 仙水峠（11：30）— 北沢峠（13：00）

B班　大阪（前夜22：20）— 伊那北 — 戸台（7：30）— 北沢峠（13：30）　北沢峠でA班とB班が合流

A班の記録

朝起きると、アイスクライマー達は登攀準備やら食事でにぎやかである。もう宮本武蔵よろしく2本の武器を持って出発するパーティーもある。僕達の方はのんびりしたものでアイスクライマー達が全て出発してから、僕達も食事をするといった具合である。

出発の用意をして小屋を出るともうヘッドランプはいらないくらいでした。ここから少し下り、またしんどいはしご登りである。はしご登りが終わると鎖場があり、なおも登って行くと七合目である。小屋の横を登って行くと夏のキャンプ場がある。ここからボッカペースで急な斜面を鳥居がある八合目まで歩く。八合目からは、左手に赤石沢奥壁を見ながら登る。奥壁にはクライマーの姿は、ないようである。先行パーティーの中でバテている人がおり、少し待つ。

頂上が見えてからも結構長いのでいいかげんうんざりしながら歩いて行くとやっと頂上直下である。ザックを置いて空荷で頂上へ登る。頂上には北沢峠からの冬山入門チームらしき人達でいっぱいである。記念撮影するつもりで川辺さんと小林さんに並んでもらったがカメラのシャッターがおりない。「アレッ!?」　フイルムが無いのである。山内笑ってごまかす。

下降は、稜線を降りずに夏道のトラバースルートを降りる。風のせいだろうがトラバースのルートはほとんど雪が無く土の上を歩く。このあたりから急に天気が崩れだし、吹雪になる。

駒津峰からは、稜線沿いに歩く。

やっと森林帯に入ると風が弱まり、ホッとする。仙水峠からはゆるやかな斜面をトボトボと降りて行くと北沢小屋である。ここでは冬でも水道の蛇口から水が出ていた。ここから沢づたいに降りて行くと沢山のテントが張ってある長衛小屋に着き、そこから少し登るとあの悪名高いスーパー林道に出る。いきなり冬山の世界に道路標識が表われたので全くしらけてしまった。まだ内藤さん達は来ていないようなので適当な所にテントを張る。予想した時間になってもこないので、あたりを見て廻ると来てもうテントを張っていることがわかる。僕達が内藤さん達の横に移る。山の中で仲間に会うというのは気持ちのいいものです。今夜も友との再会を祝って乾杯！

そして雪はすでに止み、星がいっぱいの大晦日の夜でした。

1月1日（晴）　北沢峠（7：00）— 仙丈ケ岳（10：30）— 北沢峠（13：00）

「明けましておめでとうございます。」という言葉を交して食事を始める。

今年最初の山登りというわけではりきって北沢峠を出発する。登山道に入るとすぐ急な登りでグングン高度をかせぐ。途中平坦になり又急な斜面を登ると森林帯を抜ける。

ふりむけば甲斐駒があり、摩利支天の壁を見ることができる。正面には、小仙丈ケ岳である。もう降りてくるパーティーもある。小仙丈ケ岳を登り右へ巻きこむようにしていくと目指す仙丈ケ岳を見ることができる。まだまだ歩かなければならないようです。時々せまいリッジを通過しなければならないがトレースがしっかりしているので別に不安はなく、ただ黙々と歩いていて頂

上に着いたのでした。頂上からの展望は素晴らしく、北岳、富士山、塩見岳と大変よく見えました。記念撮影をして、登って来た道を降りたのでした。

テントの中で予定していたアサヨ峰には行かないことにして、明日下山することにする。そうと決まれば呑気なもので昨日の続きとなったのでした。

1月2日（晴）　北沢峠（7：30）—戸台（11：30）—伊那市—名古屋—大阪

テントを撤収し、燃えるゴミはガソリンで燃やす。あとのゴミは長衛小屋に預け、赤河原までアイゼンをつけて下る。赤河原からまだ氷の張っている道をすべらないように歩こうとするが、よくこける。（特に僕が！）幕岩のところまで来るともう気を使わなくてすむ。〃岳人〃にこの幕岩の登攀記録がのっていたが、なかなかおもしろそうである。あともう少し歩けば戸台である。

昭和56年度　例会報告

昭和56年度7月－12月（会報№12の続き）

7月	5日	ロックガーデン　歩荷	（幸　内）
	12日	不動岩ＲＣＴ	（小　林）
	19日	菊水山 ── 摩耶山　歩荷	（山　内）
	26日	保塁岩ＲＣＴ	（内　藤）
8月	2日	夏山合宿　準備会	
	8日～16日	夏山合宿	
	24日	夏山合宿　反省会	
	30日	荒地山ＲＣＴ	（矢　木）
9月	6日	大杣池	（久　村）
	13日	妙号岩ＲＣＴ	（幸　内）
	20日	高御位山ＲＣＴ	（小　西）
	27日	御在所岳ＲＣＴ	（星　野）
10月	4日	不動岩ＲＣＴ	（山　内）
	10日	錫杖岳ＲＣＴ　（中止）	（川　辺）
	18日	山寺尾根　歩荷	（吉　田）
	25日	金ピラ山ＲＣＴ	（萩　本）
11月	1日	保塁岩ＲＣＴ	（山　内）
	8日	妙号岩ＲＣＴ＆会装備点検	（山　本）
	15日	ロックガーデンＩＴＴ	（小　林）
	22日	ロックガーデン　歩荷	（幸　内）
	29,日	蓮来峡ＩＴＴ	（矢　木）
12月	6日	六甲全縦	（吉　田）
	13日	不動岩ＲＣＴ	（山　内）
	20日	菊水山── 摩耶山　歩荷	（堀　田）
	27日	冬山合宿準備会	

会　員　動　静

住所変更

星　野　辰　也　氏　　神戸市東灘区西岡本２丁目１０－４２　　（０７８）４５３－０３６０

おめでた

内　藤　正　司　氏　　昭和５６年７月２８日　次女　美穂ちゃんが誕生されました。

小　林　利　樹　氏　　昭和５７年２月１９日　次男　大輔ちゃんが誕生されました。

心からお祝い申し上げます。

編　集　後　記

今回の会報も形式どうりの、もうひとつユニークさに欠ける出来で終わってしまったように思います。担当者として反省すべき点が多々有るとは思います。しかし最も大きな一因をあげるならば、会員全体の会報に対する協力が今一歩である事にあると思われます。

会報というものは、会として貴重なものですので、内容豊かなものでなければならないと思います。そのためにも、山行直後の新鮮な文章こそが何よりも素晴らしい会報づくりの元につながるのではないでしょうか。また、身近な山での小さな発見や、あなたの山に対する気軽な御意見なども余裕ある会報につながるのではないでしょうか。そのために皆さまの積極的な協力が必要なのです。また、現役会員のみにかかわらず、ＯＢの方々の経験豊かな御協力よろしくお願い申し上げます。　　（堀　田）

原稿提出先：（〒６７３－０２）神戸市垂水区富士見ガ丘１－１０－１２　国　沢　昭　美

電話（０７８）９９４－９６２７

神戸山岳会・会報 No. 13

昭和57年4月 発行

編集者 山本・堀田・国沢

発行者 神戸山岳会

神戸市中央区中山手通1丁目6－21

（前田浩方）

印刷所 神戸市中央区北長狭通4丁目私学会館内

甲南出版社